
あんぱんさん。



作：まきやさねゆき

あんぱんさん。



「喰えるかっ！こんなまずいもの！！」

ビュッフェ中にどなり声が響きました。
ホテルマンは申し訳なさそうに答えます。

「申し訳ございまいせん。
あいにく今日はそれしか残っておりませんで…」

「申し訳とか、そんなのはどうでもいいんじゃ！
このホテルは、わしにこんなものを喰わすんか！」

月曜日の午前10時。
朝食ビュッフェの時刻はとうに終わっていて、
ホテルではすべての食材を片づけた所でした。

時間外にもかかわらず、一人の男が
「何でもいいから食わせろ」と入ってきました。

そして出された「あんぱん」を食べて
男は怒り出したのでした。

ホテルマンは困って言います。

「あと30分ほどすればランチの用意が整います。
それまでお待ち頂けませんか？
準備ができ次第すぐにお持ちいたしますので」

「わしは今喰いたいんじゃ！
今腹が減っているからここに来たんじゃ！
そのくらい分かるじゃろうが！」

男はゆずる気配がありません。
ホテルマンは困り果ててしまいました。

「お客さま、困ります。
まだ準備中でして...」

後ろから、別のスタッフの声が聞こえてきます。
振り向くと、奇妙な格好をした青年がこちらに向かってきていました。

青年は、どなり散らしている男の前に行く
ひざまずき頭を男の口の方に向けて、低い声を鳴らしました。

「ひと口、おかじりください」

「なにい？ お前は何者だ！
へんてこなカッコして！」

「どうぞひと口」



青年は、一歩前を出て
男の口に、自分の頭を押しつけます。

青年は奇妙な格好をしていました。
体はやせ型、頭は「あんぱん」だったのです。

男は口を開き、青年の頭をひとかじりしました。
もぐもぐと噛んでいるうちに、男の顔から怒りが消えていきます。

「きみ...」

「お気に召しましたでしょうか？」

「この豆は.....」

「お分かりになりましたでしょうか」

「丹波の...大納言だ...」

「ご出身がそちらだとお伺いしまして...僭越ながら」

男はにこりと笑いました。

青年はそれを見ると立ち上がり、出口へ向かいます。

「あ、あの...」

ホテルマンが青年を呼び止めようとしています。

「あなたは、

あの、あんぱんさんでは...？」

青年は立ち止まりました。

「そう呼んでくださる方もいらっしゃいます」

背を向けたままそう言うと、

青年はそのまま去って行ってしまいました。

